



(吉野山)

奈良・藤原京跡

- 1 所在地 奈良県橿原市上飛驒町、高市郡明日香村雷
- 2 調査期間 一一九四年(平6) 二月～一九九五年二月
二 一九九五年一月～四月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
- 4 調査担当者 代表 猪熊兼勝
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 七世紀末～八世紀初期
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
一 右京七条一坊(第七五―一五次調査)

本調査は、市営住宅建設に伴う事前調査で、右京七条一坊の西南坪にあたる。この坪内には、坪中軸線にそって正殿、後殿、脇殿、門などが配され、一町規模の宅地であることが、これまでの調査で判明している
(奈良国立文化財研究所「藤

原京右京七条一坊西南坪発掘調査報告」一九八七年)。今回はその宅地の西側部分にあたる。調査面積は三〇〇㎡である。

検出した藤原宮期の遺構としては、池状遺構SX三八五とこれに取り付く東西溝SD三八四がある。SX三八五は主殿を囲む堀の西側に広がる、深さ〇・四mほどの底が平らな池状のくぼみで、SD三八四はそこから延びて西一坊大路東側溝に連続する。木簡はSX三八五から、七世紀後半の土器、漆付土器・トリベなどの鍛冶関連遺物、和同開珎などとともに、一点が出土したが、墨痕のみで釈読できない。

二 左京十一條三坊(第七五―一六次調査)

本調査は県道新設工事に伴う事前調査で、一九九一年に発見された雷丘北方遺跡の第五次調査である。この遺跡は飛鳥川右岸で、雷丘から小山にいたる小丘陵との間の平坦地上に位置し、七世紀後半から八世紀後半に及ぶ大規模で計画的な配置の建物群が確認されている。藤原京の条坊では左京十一條三坊の西南・西北坪にあたる。

これまでの調査で、中心部に四面廂付東西棟建物(正殿)と、その東西に二棟ずつの細長い南北棟建物(脇殿、また南にも一棟の長い東西棟建物(南殿・SB二八五〇)を配し、これらの建物群の東西南を掘立柱塀と溝で区画していたこと、また正殿が二つの坪の南北中軸線上にあり、遺跡が南北に二町分を占めていたことなどが明らかになっている。

今回の調査位置は、同坊の西南坪から東南坪に及ぶ。調査面積は約七一〇㎡である。

調査の結果、東三坊坊間路推定位置より東には七世紀後半の整地が及ばず、前記の大規模建物群が西南・西北の二坪の占地であろうという推定を裏付けることとなった。東南坪には七世紀前半から八世紀後半にいたる建物が存在し、その状況は小治田宮との関連が指摘されている雷丘東方遺跡に類似している点が注目される。

木簡は、南北溝SD三五八〇から三点出土したが、いずれも削屑で釈読できない。SD三五八〇は素掘りの溝で、幅二・九～五・二m深さ一m前後で、北流する。堆積土には木簡の他に七世紀前半の土師器・須恵器などが含まれ、溝の南辺は七世紀後半の整地土によって覆われている。

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』二六（一九九六年）

同『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報二』（一九九六年）

（寺崎保広）

奈良国立文化財研究所

『平城宮木簡五』刊行される

平城宮跡東南隅で一九六六年に行なわれた、第三二次補足調査で出土した約一万三〇〇〇点に及ぶ木簡の正報告書。同調査関係の三分冊中の二冊目にあたる本書では、二三四点の木簡を収録する。木簡は考課・成選木簡を主とする式部省関係木簡で、原寸大の写真を掲載した図版と解説からなる。解説では近年の調査で判明した式部省官衙の様相や、六〇一五型式木簡の形態的特徴や廃棄の仕方などについてもふれている。

図版 B4版 写真一〇三葉 その他四葉 映入

解説 A5版 本文三八〇頁 その他四五頁

頒価 三一〇〇〇円（税込） 送料一七〇〇円

販売元

明新印刷株式会社ちいどの店

〒六三〇 奈良市橋本町三六

TEL 〇七四二一三三三三

FAX 〇七四二一三六〇〇九三